

「ボスへのクルジャサマ」と「仲間とのクルジャサマ」

後藤 多恵*

私は昨年6月、マレーシアでの4年間の勤務を終えて、インドネシアのメダンに赴任した。インドネシアとマレーシアは、基本的に同じ言語を国語とし、ともに広義のマレー系ムスリムが人口の大多数を占める国である。そのため、両者が似通った国であると考えられる人も多いのではないだろうか。メダンに来る前の私も、インドネシアの中でも特にスマトラはマレーシアと似たようなところだろうから、生活環境の変化にそれほど戸惑うことはないだろうと高をくくっていた。しかし、似ているということは恐ろしいもので、油断していると思わぬ落とし穴に落ちてしまうことがある。マレーシアとインドネシアの間にも、一見同じに見えても実は全く違っているということがあるようだ。

ここでは、半年間のインドネシア生活で得た経験をもとに、「クルジャサマ」(kerja sama)という言葉について考えたことをご紹介します。クルジャサマはふつう「協力」などと訳されるが、「集団へのかかわり」と関連させて考えるほうが理解しやすいように思う。インドネシアでは、集団を構成するメンバーは常に集団内の対等な構成員としてみんな一緒に行動することが求められ、やむを得ず個人的な行動をとる場合、その集団の他のメンバー全員から許可を得なければならない。

私の職場である北スマトラ大学文学部の日本語学科では、授業に行くために教員控え室を立ち去る際、その場にいる教師全員に声をかける

のが慣わしとなっているようだ。「Pak、私はこれから授業です」「Bu、授業がありますから、そろそろ……」などと声をかけ、ご丁寧にもこれを順々に人数分繰り返すのである。私はつい最近まで、「これから授業があるので失礼します！」と全員に呼びかけるだけで、返事も聞かず教員控え室を立ち去っていた。しかし、実はこれは無作法だったようだ。正しい作法としては、「Pak、私はこれから授業です。」と伝え、相手の「ヨッ、ヨッ(どうぞ、どうぞ)」という返事を受けて、次の人に声をかけるのを繰り返すべきだったのだ。私が数ヶ月間観察した限りでは、一人でも返事をくれない人がいれば、その場から抜け出せないことになっているようだ。そういうわけで私も、他の人が帰るときには、どんなに面倒でも一人一人に「ヨッ、ヨッ」という返事を欠かさず返すようになった。

私はこれまでマレーシア人と4年間一緒に仕事をしてきたが、考えてみるとマレーシアではこのような気遣いをしたことがなかった。マレーシアの職場では、帰る前に同僚に声をかけてまわるということがない。したがって、こちらもいつ誰が帰ったか気にする必要もなかったのである。帰宅時間に限らず、マレーシアではたいてい自分の同僚がどこで何をしているかに関心を持たない。関心がないというより、知る必要がない、あるいは知るべきではないと言った方がいいかもしれない。マレーシアでは、そ

* 国際交流基金派遣専門家

の職場を管轄するボスが全てを把握していればそれでよいようだ。

マレーシアでは、職場に人が何人集まってもそこにインドネシア的集団が存在することはなく、かわりに存在するのはボスと契約で繋がった個人の集まりなのだ。それをマレーシア的「集団」と考えるならば、マレーシア人のいうクルジャサマとは、個人が「集団」の責任者に対して自分の力を貸すという構図になる。一方、インドネシア的集団は個人が組み合わせられて作られたもので、お互いが対等な立場で力を共有し合うという構図になっていると言えるだろう。

このマレーシアとインドネシアのクルジャサマの違いがわかると、インドネシアの人々の「不思議な行動」にも説明がつくようになった。教員控え室で、ある教師に「後藤先生、私はそろそろ……」と声をかけられ、「そうですか、どうぞお先に……」と言うと、その瞬間に他の教師たちも一斉に立ち上がり、「それでは先生、失礼します」「先生、私も……」と、その場にいる5、6人の教師全員が仲良く帰っていくということがあった。彼らの間で共有された行動パターンがあるのか、それとも私には読み取れない雰囲気の変化があったのか、いずれにしろ、みな絶妙なタイミングで行動を共にすることができる。こちらはついそのタイミングを逃してしまい、薄暗くなりつつある教員控え室にたった一人で取り残されることも少なくない。

「不思議な行動」は職場に限らない。同僚を自宅に招いて夕食会を開いた時のことだ。食後の歓談が一瞬途切れたところで、学科長が招待への感謝の言葉を述べたかと思うと、25人いた招待客が次々に学科長について家を出て行って

しまった。来るのも帰るのもみんなバラバラというマレーシア式のパーティーに慣れていた私は、この時ばかりは「何かこちらが失礼なことをしてしまったのではないか」と考え込んでしまったほどだ。しかし、この「不思議」な行動はどのパーティーにも見られることだったようだ。日本国総領事館が主催した公式の晩餐会でも全く同じ場面が繰り返された。終了予定時刻の30分くらい前、招待客が一人二人と帰り出したかと思うと、100人近くいた招待客のうち約80人のインドネシア人があつという間にいなくなってしまう、広い会場には日本人招待客ばかりが残されたのである。

マレーシアとインドネシアは、使用言語や表面的な文化は非常に似通っているが、その社会システムや行動様式には大きな違いがある。インドネシア人の言う「クルジャサマ」とマレーシア人の言う「クルジャサマ」は、言葉は同じでも、それらの示す内容は大きく異なっている。ましてやそれを「協力」と日本語に置き換え、日本社会での概念と同じものととらえると、大きな誤解を生むことになりかねない。「クルジャサマ」は、「協力」ではなく、むしろ「集団において意思決定を行う権限を持つ者に対して構成員が負う義務」のようなものなのだろうと思う。マレーシアではボス1人が権限を持っているのに対し、インドネシアではメンバー1人1人が権限を持っているということだ。

異文化の言葉を自文化の言葉に安易に置き換え、わかった気になるのは危険だ。ある言葉が社会の中で実際にどのような意味で使われているかは、その社会に積極的に関わっていく中ではじめて見えてくるものなのだろう。